

牛のお産「入来バージョン」

○, 松元里志^{A)}, 片平清美^{A)}, 富永輝^{A)}, 石井大介^{A)}, 柳田大輝^{A)}, 飯盛葵^{B)}, 大島一郎
A) 鹿児島大学農学部附属農場入来牧場, B) 鹿児島大学農学部附属農場

背景及び目的

入来牧場では、黒毛和種及び口之島野生化牛を、生産管理しています。黒毛和種の生産は、霜降りの入った高品質な肉を生産することが目的とされています。当牧場でも、黒毛和種では、高品質な肉の生産に重点を置き生産管理するところであります。一方、口之島野生化牛は、古来の牛の原型に近い牛で、高品質な肉の生産を目的とする黒毛和種とは違う肉の生産を目指しているところです。肉の生産をするうえで、素牛となる牛の生産が必要です。今回は、肉を生産するうえで欠かすことのできない牛の分娩について報告したいと思います。

材料と方法

入来牧場の牛の生産管理台帳及び名簿システム

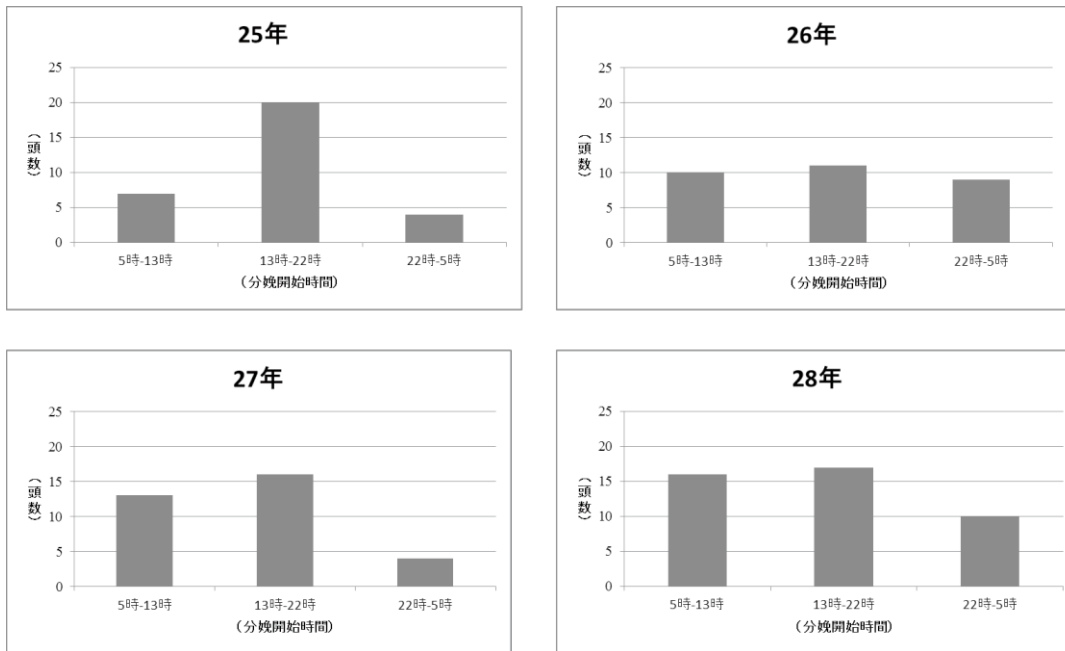
監視カメラによる牛監視システム

結果と考察

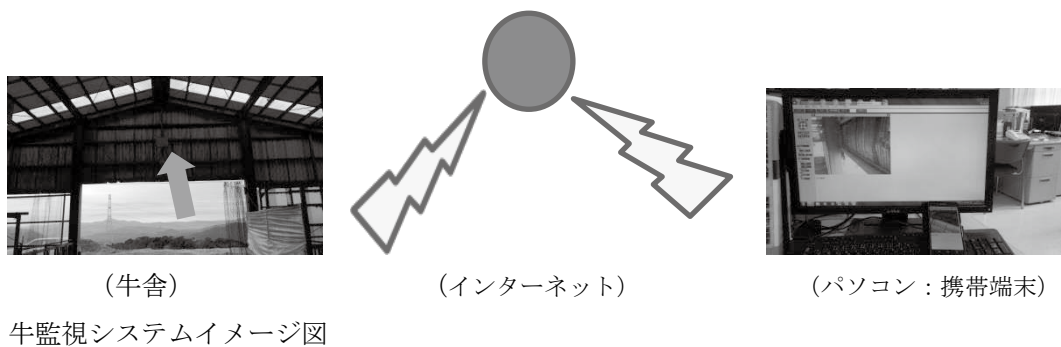
第1表から、入来牧場の出生頭数は、平成18～19年度は、100頭前後で推移してきたが、BLVの洗浄化の為、BLV陽性牛への授精を回避した為、平成20年度以降は、40頭前後の出生頭数となった。平成26年は、放牧におけるBLV陽性繁殖雌牛を淘汰し、一部隔離した為、出生頭数の減少があった。平成25年以前の流死産においては、名簿記載を行っていないため不明ではあるが、26年度以降は、流死産予防のワクチン接種を行い予防に努めている。また、平成21年度以前は、登記牛が全くいない状態であったが、23年以降は、半数以上が登記牛となり登録制度を活用した優良系統の造成が進んできました。同時に、分娩監視システムとして、監視カメラと温度センサーを併用しながら分娩を行ってきました。温度センサーは、臍内に温度センサーと発信装置が装備された器具を挿入し、分娩時に排出され、温度の異常を感知し、分娩が始まったことを知らせる装置です。しかしながら、牧場は、高地であり、牛の体温が外気温に左右されることが多く、分娩とリンクしないことが多々あり、その都度職員が、駆けつけないといけない状態が続きました。牧場では、深夜における分娩をなるべく少なくできないか検討した結果、飼養管理方法を工夫することで深夜業務改善を試みしました。同時に、監視カメラでの牛の観察を定期的に行い牛の行動の把握に努め、分娩徴候を、ある程度まではつかめるようになりました。牛が本来持つべき本能としてのお産を、人間が介助することなくお産をさせることとしました。お産時における事故等が増えるのではないかという危惧がありましたが、お産の事故率は低く、同時に、流死産防止のワクチンの2月～4月までの接種により26年以降は低い水準に抑えられています。第1図からも、年々業務時間内、その前後に変動してきています。しかしながら、監視カメラは、無線LAN—インターネットで構成されるため、電波状況の悪い牧場では不安定さがあり、有線LANへの変更が望まれるところです。

第1表 出生頭数・雌雄別及び登記牛の推移

	出生頭数			流死産			登記牛	
		オス	メス	オス	メス	不明	オス	メス
18年	97	50	47	記載なし				
19年	106	55	51					
20年	38	19	18					
21年	43	25	19				6	0
22年	42	21	21				7	6
23年	47	29	18				19	11
24年	44	24	20				11	12
25年	43	22	21				13	14
26年	36	16	15	1	4	0	12	11
27年	42	25	16	1		0	12	14
28年	47	16	24	2	2	3	11	13



第1図 年次別分娩開始時間



牛監視システムイメージ図